

2004年(平成16年)8月20日(金曜日)

喪友記

四元義隆氏 である。問題はあくまで
が亡くなっ 政治家という人の側にあ
た。血盟団事 る。古人は「国家一人に
件に連座する して興り、一人にして亡
など戦前から ぶ」といったが、そのと
政治の裏面史に関係し、 おりだ。その「一人」たる
戦後はおお方の歴代総理 者の心構えは「無私」と
のご意見番といわれた方 いうことであり、本当の
だ。私もたびたびご教示 謙虚さは「無私」からし
に与ったひとりである。 か生まれぬ。その地金
御縁は、私が を平素から磨い
ておくことが肝
要だと繰り返し
言われていた。

四元義隆氏を悼む

「無私」を磨く

細川 護 熙

ご自身の座右
の銘は中国唐代
の裴相国の「其
言簡、其理直、
其道峻、其行孤」

からお声がかかったのだ で、まさに言葉少なく、
った。京都の建仁寺など 自らを持って波乱に満ち
での参禅にお伴をさせて た生涯を生きた一生は、
頂いたり、折りあるごと その通りのものだったと
に、お話を伺ったものだ。 思う。いま改めていがぐ
四元氏が私に言われた り頭の禅者的相貌を懐か
ことは個々の政策の是非 しく想う。合掌。(ほそ
ではなかった。社会のい かわ・もりひろ 元内閣
ちばんのおおもとは政治 総理大臣)